

叢雲工業産のネタ兵装ギア

Shukurea

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類がヴァイスの侵略によって地球を脱出し、シャードと呼ばれる居住区で生活していた頃のことである。

数々の企業が対ヴァイス用兵装であるアリスギアを開発し、日夜競争を繰り広げていた。

そんな中、成子坂製作所が叢雲工業を吸収したことでとあるチームがかつて地球で男たちを虜にしたゲーム会社の如く、次々とネタ兵装を作っては、性能試験で脳汁をブツシャーする…という変態企業さながらの行動をしていた。

さあ、ロマンを求めようじゃないか。

※この小説は私が考えたオリジナルのネタ兵装ギアの開発経緯をオムニバス形式で語るものです。

一部、ストーリーミッションのネタバレを含みますのでご了承くださいませ。

目次

変態技術者チーム「GINPATI」の設定	1
GCHKbc09・お前らボールな!	3

変態技術者チーム「GINPATI」の設定

作中オリジナル用語、及び人物紹介

チーム「GINPATI」

通称：変態技術者Aチーム

叢雲工業ができた頃から存在した技術屋集団。

叢雲工業が合併・吸収される前は比較的大人しかったが、成子坂製作所に来てからは暴走に暴走を重ねてカオスな狂気を抱えることになる。

主に様々なアクトレス専用装備の各パーツにおける新型を作製してるが、いずれもネタ兵装ギアばかりで「頭悪い」とか「バーカ☆」と言われるものの、彼等からしたら褒め言葉にしかない為に無意味である。

とは言え、そんなネタ兵装ギアに理解を示すアクトレスも存在し、それらを使ったアクトレスからは大型・小型を問わずに討伐効率が上がったという報告すら存在する。

その為に意外にも予算は高めに設定されているらしい。

銀中 釣男 56歳

通称：主任

GINPATIのリーダーを務める技術屋統括長。

変態技術者を凝り固めた様なアイデアを思いつく人物で「アホと天才は紙一重」をその身で体現している。

とにかく吹っ飛んだギアを開発したいらしいが、人道的な配慮は忘れない辺りまだマトモであろう。

名前はアーマードコアVの主任使用機体「ハングドマン」から。

浅田 平八 54歳

GINPATIの副統括長を務め、釣男の古くからの友人。

釣男が暴走するなら彼はブレーキ役で、あらゆる企業の開発ギアを

観察しては、必要されるであろうギアの種類やギアスキル、他企業のギア形状などを分析してアクトレスのギアに形成する：など理論的に考えて作るタイプ。

とは言え、ネタ兵装ギアにも興味はあり、釣男の設計に校正をかけるように訂正すべき箇所を指摘してからネタ兵装ギアとしての完成設計図を作成する。

尚、胃薬よりは酒と炭酸飲料でストレスを飛ばした方がいいというのは彼の唯一ぶっ飛んだ部分である。

木目 蓮香 26歳

GINPATIの紅一点で、ロボゲー大好きガール。

元はゆか同様に津軽シャード出身だが、5歳くらいに東京シャードに移住して、それ以来アクトレスを夢見る。

ただ、本人は運動オンチで適正と体力はあれど兵装を器用には動かせない為に辞退はした。

その後、ロボゲーに出会い、果てにはロボゲーの全シャード最強決定戦で優勝するなどガチガチの廃人ロボゲーマーである。

そして、それを見た釣男は「いいじゃないか、試してみる？」とアルバイト感覚でスカウト・採用し、釣男や平八からギア開発用の教育を受けて、アクトレス適正のある事から成子坂のテストアクトレスとして正規雇用の形を取った。

釣男や平八から教育された為か、ネタ兵装ギアの開発経緯に重要なアイデアをポロつと言ったりするので、ちよくちよく採用されたアイデアを兵装にして、アクトレス適正のある自身の体を使った試験稼働も行うようになる。本人は満更でもない模様だが。

因みに、胸はほどほどにある：と言うが、脱いだら凄い：らしい。

名前の元ネタはマグノリアの属であるモクレン属から。

「名称不明」

本作のオリジナルラスボス。

その目的は不明だが、人の可能性を信じていると語る。

G—CHK—bc09・お前らボールな！

それは、地球が奪われてシャードという居住コロニーで人類が暮らす時代に存在した、ロマンを求めた変態技術者共の話である。

—203X年 5月12日 午前8時50分

成子坂製作所・地下開発室—

まだ始業時間前であるにも関わらず、薄暗い部屋にはU字型ハゲが進行し、機械油の跡が残る作業着を着ている男が居た。

その男はナニカを作っているようだが、狂気を含んだ笑みでソレをニヤニヤと見ていた。まるで新しい玩具を見つけた子供のよう。

その男がドライバーを手に、そのナニカに手を加えようとしたとき、照明を点けたために部屋が一気に明るくなって、背後にはV字型のハゲが進行した頭を帽子で隠し紳士服を着た男性が立っていた。

「おはようさん、昨日行われた例の企業別アクトレスギア展覧会行ってきたぞ、釣男。」

帽子の男は作業着を着た男・釣男に向かって話しかけた。

「おーそりゃあぐっ苦労さん、八ちゃん！早速だけど、今回のカタログを見せてもらえる？」

釣男は八ちゃんと愛称で紳士服の男・平八に答え、平八が行った展覧会のカタログを見るために作業を中断した。

「ああ、こいつが今回のカタログだ。ま、俺が見て分かったことや、予測されることも言っておくぞ。」

そう言っつて、平八は企業別アクトレスギア展覧会の資料を差し出す。

この企業別アクトレスギア展覧会とは年に4回行われるアクトレス産業関連企業の発表会のようなもので、技術資本主義を貫く「ヤシマ重工株式会社」や、高火力と高耐久性を主軸とする「アーリー・フアイヤーアームズ(EFC)」などの各企業が新製品をプレゼンし、アクトレスとの契約や資本投資などの契機を得るためにそれぞれがしの

ぎを削る「戦場」のようなイベントである。

紳士服の男・平八はこのイベントを視察して、各企業がやってないことや現在の新型ギア開発で臨まれる需要などを分析し、どんなものが必要かを判断する頭脳派のアーキテクトである。

「へえ、今回も十人十色が少し薄まったって感じ？まぢまぢな奴も多いし、次までは期待できるかなあ？」

「だろうな、新興企業も追い越しに行くかのように新型の発表してたしな。だが、今回乏しいなと思ったのは、近接型スキルや、性能向上型スキルを保有した新型が全くなかったことだ。最近は何処も彼処も攻撃型スキルを持ったものしか開発してないから、多様性には欠ける部分があるだろう。」

「あらら、そりやつまらないなあ。つてなると、だ。次のギアはそれを軸に吹っ飛んだヤツを作ればいいってことだな？ハハハッ。」

「まあ、そうすれば場外からのストライクボールともなるだろう。ただし、余りにも吹っ飛び過ぎたやつは作るなよ？吹っ飛ぶ過ぎはボールどころかデットボールになりかねないからな。まあ、そうなつてもいつも通りに俺が訂正するだけだが。」

「ギャハハッ！ま、そうだよなー、つてイテテテテテ!!」

慣れたような手つきで平八は釣男の頭を思いつきり驚掴みにする。

「お前なあ・・俺がいつもどんな気持ちで訂正してるのか分かってるのか？確かに、お前とはマブダチだが何度言ってもわかんないやつにはお仕置きが必要だよな？そうだよな？うん？」

「スミマセンデシタ、ハイハチ〓サマ」

「なんでそこだけ棒読みなんだ？…まあ、いいさ。取り敢えず、今日はあの隊長君（本ゲームの主人公）がスカウトしたアクトレスの模擬戦闘の試験稼働をするらしいから、それを見に行ってくる。もうじき彼女も来るだろうから、また思いついたら連絡入れてくれ。」

驚掴みを外しながら平八は出る前にそう伝える。

「あいよ、面白い奴作るぞう！」

「まあ、空振りはないように…な。」

そう言うのと平八はそのまま部屋を出用とした、そのタイミングで地

下開発室への階段を降りる音が聞こえてきた。

「おはよう、蓮香さん。噂をすれば来るとか、明日はヴァイスの雨でも降るか?」

階段を降りて来た女性・蓮香は平八のジョーク混じりの挨拶に対して、

「ヴァイスの雨!??私、そんなに厄病神みたいな存在と思われてるんですか!??」

「あー、違う違う。いつもは俺より早く来るからさ。ま、相変わらずのコミュ障って奴か。」

「それは、そうですね…うう…私は悲しい、ポロロン。」

「何処のヒドツマニアだお前は。あ、そうだ。さつき釣男に展覧会の資料渡したから、見たかったらお好きにどうぞ。」

「え?平八さん、展覧会行ったんですか!??あの会場、私も行きたかったなあ…」

「ハハ、前に行くって開発室で言った時に行きたいって言ってくれたら連れて行ったのにな。話をしない君が悪いんだぞ? (ニツコリ)」

「むー、なんかムカつく笑顔ですねツ!愉悦って奴ですか!??いいでしょう。なら、今度新作ロボゲーの「ソウルギア」でボコボコにして…って、もう居ないし!勝ち逃げなんてずるいー!」

「ギャハハ!朝から盛り上がってるねえ!」

…と、何気ない話を聞きながら他の技術屋達が仕事に入る中、彼らの日常業務は始まるのである。

とは言えども、日常業務は予算が示されてなければ基本はパソコンワークなので、特に釣男は先程弄っていたナニカを触りたくてうずうずしていた。

「はー、早くアレ弄りたいなあ…」

「弄りたいなら手を動かさないとダメだと思いますよ。私だって積みロボゲーありますし。」

「ま、そうなんだけd…ん?」

釣男のデスクにあった電話が鳴る。

「はい。あ、八ちゃんか!…え?もう予算額出たつて?…ほーん。中々いい金額じゃない?これなら充分望めそうだ。…あー、まだアイデア出てないし、これからつて所かな?…ああ、りよーかい。また後でなー。」

そう言つて電話を切る。内心、嬉しい顔をしながら。

「お?予算がかなり出たんですか?」

「そゆこと。コレは吹っ飛んだナニカが出来るぞー。」

「まあ、出来ないという意味ないんですがね。」

「勘のいいガキは嫌いになっちゃいそうだ…」

そう言つて黙々とパソコンワークを続ける彼ら。

と、蓮香がパソコン画面で成子坂所属アクトレス達のヴァイス討伐報告を確認していると、こんな事を言い出した。

「あ、そー言えば疑問に思ったことがあるんですけど。」

「何?どしたの?」

「今のアクトレス用ギアでギアスキルつてあるじゃないですか。ふと、思つたんです。なんで近接ギアスキルは腕装備だけなんだろうかって。」

「つまり?脚がなんで無いのか…つてことか…脚…ん?」

その話を聞いた釣男は突如、真顔になった。

「どうしました?急に真顔になって。」

「ピーンと来たかもしれない…よーし!さつさと仕事終わらせて設計書くか!八ちゃんに後で言つておいて、新兵装思いついたつて。」

「え?あ、はい!」

所変わつて、Aegisの模擬戦闘区画。成子坂所属アクトレスの様子を見ていた平八の携帯に着信が入る。

「もしもし、どうした?蓮香さん。…マジか。もう頭に浮かんでいる

のか。…ほう、脚…か。それなりに鍛える必要もあるが…まあまあ面白くなりそうだ。分かった、一応Aegisにも新兵装の試験稼働をするって伝えておくよ。…ああ、そちらは取り敢えず設計を完成してくれ。頼むぞ。」

そう言つて携帯を切ると溜息をついて

「やれやれ、また脳汁吹き出してるな？釣男。」

午後2時 成子坂製作所

地下開発室

Aegisから帰ってきた平八は、蓮香と釣男の書いた設計図を見ていた。

「ふむ…これまでに存在しない脚の近接ギアスキル持ち兵装か…アイデアとしては悪く無いと思うがな。」

「また私の疑問からこんなゲテモノを…すみません…」

「いや、蓮香さんもグツジョブだと思うけどな。今回は君の疑問が導いた新兵装だ。だが、問題点を挙げるとすればスキル使用中にどうやって通常のブースト稼働をすらかつて点と、エネルギー効率だな…」

「ですね…これまでアクトレス達が使用した近接ギアスキル保有型はいずれも肩パーツの質量兵装でしたし、この設計図の段階で前方への膝蹴りや突き蹴りができるようにする為に、膝と足先の変形機構持たせても機動力への影響が考えられますね…。」

「一応、ランス系のクロスギアと同じく離脱向上機能は持たせたんだけどねえ。何か足りないなあ…」

「スキル稼働時に通常と変わらない機動力を保持するために必要な要素…か。逆にエネルギー系の刃や仮想の半月板ではシヨット型と変わらないし、矢張り質量兵装にしたい部分はあるな。」

「…待ってください、膝と足先で蹴り飛ばすなら半月板にこだわる必

要は無いと思うんですが。それこそ膝先の側面に補助翼として付けて、それを使用時のみ膝蹴りの刃にするなら質量兵装として機能するかと考えてます。」

「ほう、中々面白いじゃない？それなら足先の展開機構は10式G型／Tみたいな刃の展開を同じようにすれば、ブーストの排出口に影響無いと思うし。」

「まあ、離脱向上機能がある時点で通常の稼働状態に近づけるのが解決すべき点だからな。補助翼として通常時に機能するのなら、彼方も文句は言わないだろう。後は他近接ギアスキルと同じく、使用中に発生する性能向上を装備すればいい感じに仕上がるだろう。」

「でも、補助翼として機能するのなら、高機動型はまず無理ですね…せいぜいバランス型として機能するのがベストですね。重装型なんて論外なんで。」

「よし、大体纏まったな。タイプはバランス型、ギアスキルは稼働時にランス系の途中離脱向上機能有りの5連続突き、装備補助翼を展開して相手を蹴り飛ばす…以上を理解した上で設計図を訂正しよう。」

「んじや、後頼めるかい？八ちゃん？今度焼肉奢るからさあ。」

「…わーかったよ、ボイレコに録音したから必ず守れよ?」

「へいへーい。…って徹底し過ぎじゃないか!?!」

「うるさい、俺は炭酸飲料と酒でストレス発散するんだ!お前も、付き合えよ? (ゲス顔)」

「うわあ…絶対色んな意味で勝つ気満々だこの人…」

こうして、新型兵装のコンセプトは決まり、成子坂の製作班に委託された設計図は1週間で仕上がり、テストパイロットである蓮香に装備させて試験稼働を行うことになった。

1週間後 A e g i s 東京シャード本部

模擬戦闘区画

「ヒヤッハー…ヴァイス、お前らボールになれやあ!」

と世紀末じみた言葉を吐きながら、蓮香は模擬ヴァイスの的を次々と破壊していく。

A e g i s の上官もこれには白目を剥いて

「こ、こんなゲテモノ装備して問題点は本当に無いのかね!? 明らかに某世紀末アニメみたいな感じなんだけど、アレ。」

それに対し平八は

「ご存知ありませんか? 彼女、ロボゲーで有名な方でして、実は火力全振りとかが好きらしいです。元々、アクトレス適正はあったらしいんですが、当人の体力があっても兵装をマトモにこなせなかったらしいです。ですが、私たちがテストパイロットとして正規雇用したことによって、一種の不満解消に繋がったのでしよう。」

「…まあ、仕方ない事か。多分、試験を受けたのは10年くらい前だから当時はロクに扱える兵装も無かったからな。」

「ま、当人はこんなに飛べて満更でもないようですが。」

「全く、釣男くんといい、君らといい、なんでこんなゲテモノ作れたんだ?」

「うん? そりゃ、決まってますよ。我々は吹っ飛んだヤツを作りたいんで。頭の悪いアイデアから生まれた兵器が過去の戦争で活躍したって話があるでしょう? それ故ですよ。」

「バーカ☆」

「上官さん、それ、釣男に対しては褒め言葉にしかないから。罵倒しようとしても無意味だから。」

「面妖なヤツらめ!!!」

上官の嘆きを側に、試験稼働は概ね成功する様子を見ているマブダチ共であった。

後に行われた企業別アクトレスギア展覧会で、他企業の技術者から「面妖な変態技術者共め!」と罵倒という名前の褒め言葉を貰ったのは言うまでもない。

そして、発表時の開発したギア形式番号は

G—CHK—bc09

と発表され、一部アクトレスから専用装備化を申請されるほどの反響を呼ぶ事になる。